

「ブルースパニッシュユアイズ」(散文詩)

多谷昇太

Here, I,m in youth hostel of Frankfult
city.

There is cold wind blowing bittely at
outside.

It, s just like my European life.

How cold, and how miserable it is!

I,m losing my way, object, and all other
things.

But, just at that time, you have appeared
front of me, with the beautiful blue
spanish eyes.

spanish eyes

front of me' with the beautiful blue

spanish eyes

失いたくない、始めの心を。
なくしたくない、更生への誓いを。

戸外に吹きすさぶ冬の嵐に心は萎え、
すべてを見失いそうな今、

俺はペンを取り、ユースホステルの壁にかかった女優の
写真を、憑かれたようにスケッチしていた。

『馬鹿にするな。俺はただの放浪者でもなければタワシ
でもない。ランボーを求めてこの地まで来た、俺は詩人
であり、絵描きであり…』などと、

自らに云い聞かせ、他人に示してもするかのように、ひ
たすらペンを走らせていた。各国の若者であふれたロビ
ーは騒々しく、それぞれの会話に夢中になっていて、俺
に関心をほらう者などいない。

『目障りな野郎だ。ここで何をしている。貝のように黙
りこくった、つまらない東洋人め』

とても伝わり来る想念は、俺意外の者すべてのものだっ
たか、それとも俺が俺にこきえたものだったか…判然と
しない。とにかく俺の心はフリーズ…凍っていた。

つい昨日まで市郊外のタウヌス山で、俺は寒空のもと野
宿していたのだった。文無しだったから。

しかし寒さと空腹に耐えきれず、市内に戻って来ては夜の街角に立ち、付けていたセイコーの腕時計を歩行人に売りつけて、ようやく10マルクを得たのだった。昨晩泊ったユースのベッドの温かき、そして今朝のパンとソーセージの美味しかったこと……

いまこうしてスケッチをしているのは空腹を忘れる為というよりは、魂の空しさと飢えが、たまらないから……それを少しでも充たしたい。

身心ともに極まると人はどうなるか。人の目をしていなくなり、ふふ、アウシユビッツの囚人然として来るのさ。でもまさしくそんな時に、君は現れた……

「ハロウ」

魅惑的な声が後ろからかかる。

振り向けば俺の顔近く、腰を屈めて俺のスケッチを覗き込む美女の姿があった。

『どう？ 私は。そのソフィア・ローレンと、どっちがきれい？ よかったら私がモデルになってあげようか……』とでも云いたげな視線を俺に寄こしてくる。

何と云う青い目だろう。地中海のコバルトブルーを見る

ような、吸いこまれるような美しい目をしている。髪は金髪でGパンを穿いた、実に綺麗な娘だ。

男に言い寄られることに馴れているのだろう、気の利いた俺のセリフを予想して、そのままじつとしてる。

『……だけど君、俺の正体を知っているのかい？』

昨日まで山で野宿をしていた男だよ。ああ、まったく……

何というミスマッチを君はやらかしてくれてるんだ？

俺は……俺は……』

ハッとばかり彼女が気づく。

俺の目の中に底なしの寂寥と空しさを一瞬で見たようだ。すぐに彼女は離れて行ったが、それまでの僅かな数秒間、心と心の会話はなされ、そしてそれは以後無限回俺の心の中で繰り返されたのだった……

「あなたの心は凍っているわ。弱々しくって……男じゃないのね」

「そうだ、俺は弱い。だから君の好意に応えられない」

「だあって、女の私から声をかけてあげたのに、それでも乗って来れないの？ ひどいじゃない」

「俺は無一文で、イエローのヤープで、明日にでもまた宿無しの身だぜ。何が出来る？」

「へー、そうなんだ。だけどあんたの懐なんか聞いてないよ。国籍も人種も。そんなこと云うんだったら私だってこの国では蔑まれるスペイン女よ。あんた、そんなことを気にして生きて来たの？これから生きて行くの？」

「それだけじゃない！…俺は生来孤独で根暗で、どうしようもない…」

「ハッ！まったく自分に二重三重に錠を掛ける男ね、あんたって人はーそんなもん、あたしって鍵を使えばみんな開けられるのよ！バカよ、あんたは。格好つけて、自分から引いてばかりいるんだわ。せつかく釣られてやろうと思ったのにさ。じゃあね、チャアオ」

無論そんな会話が実際に為されたわけではない。言葉ではなく、殆ど一瞬で交された二人の間のイメージの錯綜だった。いや、もしかしたら俺一人の内ので為されたものかも知れない。

3 取るに足らないダサ男の、ただのみっともない顛末なの

だが、ただ…歌が聞こえて来るのだ…

♪ 音楽

ブルー・スパニッシュアイズ、

つめたい人ね、あなたは。

ブルースパニッシュアイズ、

わたしは海よ、青い海。

満ち潮となつてあなたのもとにやつて来たのに、

どうして逃げてしまうの？

なんて愚かな人なの、あなたは。

幸せを、幸せを、自分から逃してしまつなんて。

あなたを浸そうとしたのに…

さようなら。もう引き潮よ。さようなら…

♪ 音楽

文無し、イエロー、陰気で孤独…

自分を蔑んでいるようでその実、

自分を守り、飾っているんだ、格好をつけている。

俺は絵描き、詩人、ランボーを継ぐ者などとぬかすのと

まったく同じだよ！

As your
attitude
is like so...
so am I!

so am I \

それなら訊くが金持ちで、白人で、陽気なら、あるいは詩人で絵描きなら、俺は青い海に浸れるのか？

いつかそうなったら俺は…などと云ってたら、人生は終つてしまふぜ。いったい何の為にヨーロッパに来た？

自縛の殻を、弱さを壊し、払拭しようなどと云って来たんだつたな？ だつたら…

すべて裸になれ！裸になつて青い海に浸れ！

いつまでも「たら」「れば」の虚飾を付けているようだつたら、こんどはほんとのプーターローにしてやるぜ…

彼女が戻つて来た、男たちを従えて。俺の目の前で自分のモテモテぶりを見せつける。陽気な、マシンガンのようなスペイン語の弾を、あたりに撃ち散らしながら…



「なんて素敵な朝」

「グーテンモルゲン」と挨拶しようにも

まだ誰もいない早朝のレストラン。

僕だけが窓辺の特等席に座り、

表に広がる一面の雪景色を堪能しているんだ。

コックや給仕人たちはまだまだ起きて来はしない。

雑役にして皿洗いの僕だけが

こうして広いレストランを独り占めになっている。

かくして仕事前の素敵な時間、素敵な朝の

始まり、始まり…

まず保温されたアルミ製の収納ケースから

パンを二つ取り出して…と、

バターとジャムを添え、

自動サイフォンからコーヒーを淹れ、

それを窓辺の特等席にしつらえて…と。

「お早うございます。葉巻などいかがですか？」

「いやいや、シエフじゃあるまいし、僕はこのサムソ

5 ン、手巻きの紙巻タバコで充分です」

などと一人芝居、おどけて見せる。

休み時間にはいつもここに腰掛けて、葉巻を燻らせてい

るオーナーにしてシエフの、

ミスター・ビッシュォフを思い浮かべつつ。

彼とその御細君は僕の回生への恩人だ…

「チュン、チュン」

おや、お早う。僕と同じ早起き雀たちが

窓辺の外にやって来て、朝の挨拶をしてくれる。

早朝の金銀ひかりを身にまとい、楽しげに戯れだした。

「チュン、チュン、豪華ですねえ、独り占め」

「チュン、チュン、どこから来なすった」

雀語で僕が答える。

「チュン、へえ、日本から。それはそれは」

挨拶を終えて雀たちは雪原へと散って行った。

ああ、それにしても、

こんな素敵な朝、こんな素敵なひとときを持てるなんて。

そしてこの、夢のような白銀の世界を見れるなんて、少

し前の僕が…どうして想像し得ただろうか!?

ここにお世話になるほんの前のこと。

冷気せまる街角で、寒風すさぶプラットフォームで、

僕はリュックを背にして、鼻を噛み差別心を丸出しにする人々に、反抗の眼差しを込めて、しかし無言のままにひとり寂しく突っ張っていた。

心の中にも寒風が吹きすさび、僕は恐らく、人間の目をしていなかったろう。手負いの獣のごとし…

しかしそんな僕を温かく迎え入れ、

雇ってくれたオーナー夫妻、使用人たち。

自分の暮しに充ち足りた、心豊かな人たち。

凍った僕の心が解けて行く。

スイス、サンガレ、美しい街、

白銀のウィルドパーク…

人の心を取り戻した僕にとつて、

いま与えられているこのひとときは、

永遠と引き換えにしてもいいくらいなの、

充ち足りた、新生のひとつとき。

憎しみも、焦燥も、みんな消えて行く。

6 例えこのあとまた修羅の巷に戻るとしても、

僕はこのひとときを、この朝を、

決して忘れまい。

充たされる豊かな心が僕にまだあることを、

決して、忘れまい…

「チュン、チュン」

おや、雀たちがまた帰って来た、どうしたの？

え？僕の表情（かお）があんまり素敵なんで、

また帰って来ましたって？

それはそれは、ふふふ。

そうだねえ、雀たちよ、僕はようやくこの頃、

幸福の不可思議な術を、君たちの楽しげなわけを、

やっとなつかみ始めたところなのさ。

この新生あふれる朝に、神のみ心に沿う喜びを…

（※一九七四年、スイス、サンガレ、ウィルドパークにて）



「アフガンの夜」

魅せられしはアフガンの夜。

星の光のあまりの明るさ、美しさに、

わがこころ驚き、すなわち嘆きぬ。

斯くも静謐なる光を受けるなら

妖精らも出でむ、月の女神も舞い降りむ。

幼子に戻るか、伽の世界へ行くか、知らず。

現し世のすさみから放たれ、

原初の世界へ誘われんとする、そは魔法なめり。

女神よ、舞え。妖精（こ）らよ、遊べ。

もの皆なべてこの光のもと安逸たれ。

我とてもえやは受けざらん、この原初のやさしき光。

ムーンシャワー、スターダスト浴びるがに。

国の人あらば見せまほしきよ、云いまほしきよ、

我らが国の夜空（そら）は空にあらずと。

失われおりしはこの満天の星空、それに比すべき我らが

清心たりき。毒心、邪心、欲念、もろもろの不浄、この

光のもと、みな洗い流さばや！

流れ来るコラーンの祈り声に、回教徒ならずとも額つき
、また起きては、その声がむた星の世界へと飛びたたざ
るや。

かくこそ思わぬ、このアフガン夜空に…

